



スリーエー
ネットワーク
1600円

天皇の記者たち

―大新聞のアジア侵略―

浅野健一著（天学文学部教授）

一般に人間には自分のことを高く評価してほしいという願望がある。たとえ自分が間違ったことをした場合でも、できるだけ間違い以上にひどくけなしてほしくない。信頼できる人は間違った分の非を認めるが、信頼できない人は間違いをできるだけ隠す。この現象は一個人の場合だけではなく、一つの民族にも見られる。

日本では第二次世界大戦前に軍国主義が蔓延し、軍部を中心に「大東亜共栄圏」という看板を掲げてアジアに侵略し、アジアで許し難い犯罪を犯した。これは紛れもない事実である。この事実に対してどんな態度で究

明すべきかは、日本人にとって世界に信頼されるか否かにかかわる重大な問題である。

新聞学専攻の浅野健一教授は

学生を率いて、第二次世界大戦中、日本の新聞界がどんな振る舞いをしたのかを調べ、その調査報告を『天皇の記者たち――大新聞のアジア侵略』にまとめた。同書では、アジア各国から資料を集め、侵略の責任が軍部だけではなく、当時の新聞界にもあることを結論づけている。

私は新聞学には詳しくないが、本書は少なくとも二つの点で意義があると思う。一つは本書は日本近代史の研究において新しい資料を加えることができるということである。もう一つは日本の戦争犯罪の新しい事実を究明するのが外国人ではなく日本人によって行われたという点において、さらに大きな意義があると思われる。

沈 力（大学言語文化教育研究センター専任講師）



学文社
2,100円

社会福祉援助技術論

岡本民夫（天学文学部教授）

小山 隆（天学文学部助教授ほか編著）

人々が日常生活を営む中で発生する生活問題に対して、専門技術、専門的知識を用いてその生活問題の解決・軽減をめざしていくのが社会福祉援助技術の課題である。将来に社会福祉専門職者をめざし、この援助技術を学校で学ぶ学生としては、保育や介護を学ぶ福祉系専門学校生、短期大学生、そして大学生に至るまで広範囲に渡っている。また、実際に社会福祉現場で働いている職員や関係者も現任訓練や研修会を通じて、本書にて学ぶ対象にもなっている。本書の特徴は、これらの広範囲に至る学生・現場職員などが学べるように工夫されているこ

とである。介護福祉士・社会福祉士養成国家試験シラバスに準拠しながら、わかりやすい文章表現を用いて援助技術の基礎的理論を最新理論も含めて体系的に修得できるようになっている。

また、社会福祉援助技術論は単に理論を修得するだけではなく、現場にて働き出した時に実際に役立つものではないことから、この書では後半の実践編として、事例研究を積極的に取り入れている。つまり、実践場面で生かせるように、施設や在宅での援助事例研究を通じて学生や現場人に問題把握と解決方策への取り組みができるようにしてあることも本書の特徴といえよう。ぜひ一読をお勧めしたい書である。

黒木保博（天学文学部教授）



中国新聞社
1,300円

瀬戸内の海人たち 交流がはぐんだ歴史と文化

森 浩一著 (天文学部教授)

周囲を海で囲まれた日本列島において、古代中世の主人公は、農民よりむしろ、海を生活の糧とした人々の中に求められる。本書は、森浩一教授が長年にわたり提唱してきた、海人の歴史的な役割について、とくに瀬戸内海を中心にして、新たな切り口で分析したものである。

芸予諸島の大三島に鎮座する大山積神は、別称を「渡しの大神」という。渡守が景行天皇に對し對等に渡し賃を要求した説話は有名だが、大山祇神社と芸予諸島は、その意味で瀬戸内でも最も重要な海の道であったと言える。そしてこのルートが、弥生時代に築かれた高地性遺跡

の分布と重なり合うのである。

海人とは、漁労に巧みであっただけでなく、実は情報のネットワークの要にいた人達なのであったのだ。しかもこのことは、彼らが最新の技術に長け、また独自の交易圈を持っていたことを意味する。それを裏付けるように、古墳時代に十カ所程でしか出土していない鉄鋌が魚島で、三原市からは弥生時代の製鉄遺跡が発見されている。

そしてその海人を代表するのが伊予の越智氏と周防の大内氏であった。彼らはそれぞれ中国江南や百済をその出自とし、独自に中国陶磁器の輸入に関わっていた可能性もある。森教授は、東アジアの中で生きていたこのような瀬戸内の海人達の姿をダイナミックに描き出し、さらにその視野を各地の独自の文化にも広げていく。まさに一筋縄ではいかない日本社会の奥深さを実感させてくれる著作である。

鈿柄俊夫 (天文学部嘱託講師)



ヨルダン社
2,900円

ジョン・バニヤン ロジャー・シャロック著、 バニヤン研究会

圓月勝博 (天文学部教授)

坂本清音 (女子大学文学部教授)

近藤十郎 (女子大学短期大学部教授)

ほか記

バニヤン研究に欠くことのできない好著として高い評価をうける原著(一九五四年)の本邦初訳が、こうして完遂したことは嬉しいかぎりである。全七章が分担訳され、序文および第一章を圓月氏が、第六章を坂本氏が、第七章および結語を近藤氏がうけもたれて、訳文の筆をふるっておられる。

バニヤンの個性と時代思潮をきめ細やかに捉えつつ、代表作『恩寵溢る』、『天路歷程』、『悪太郎の一生』、『聖戦』をはじめ、

諸作品を的確に論じた原著の素晴らしさは言うまでもないが、その価値と魅力を見事に再現された訳者の力量は特筆すべきであらう。

「あとがき」で尾崎安氏(監訳者)も認めておられる通り、当時の社会状況やピューリタン神学など、専門的な内容が扱われ、文学用語も頻出する書物ではあるが、まったく堅苦しさを感じさせない。非常にこなれた和訳に仕上がっているばかりか、必要箇所には()づけの補筆がなされ、難解な文字には適切にルビがふられて、行き届いた親切な訳書となっている。年表とともに巻末につけられた国内外の文献紹介は、圓月氏の鮮やかな手さばきで簡便にまとめられ、有益なことこの上ない。

それぞれの訳者が持ち味を存分にだされ、一般読者の知的好奇心をも喚起してくれる、誠実に立派な訳書だといえよう。

小山 薫 (女子大学短期大学部助教授)



Meridian Books
\$10.50

The Mirror Stone S. T. Wellman 著

(女子大学文学部助教授)

人生とはなにか? 自分は何者だ? 男とは? 女とは? こういう、もろもろの疑問を抱えて、主人公のトリスタンは、はるばる日本にやってくる。まずは九州にある、小さなキリスト教主義英会話学校で教えるようになり、さまざまなことを経験しながら、三人の女性に出会い、恋してはふられるのだ。ヤクザに散々に打ちのめされ、あげくの果てに、もつとも好きだった彼女がさらわれ、身の毛がよだつような虐待を受け、半殺しにされる、という有様だ。結局、世の中は狂っている、としか言いようがない。不可解で不合理なものだ。「人生は人間のちっぽけ

な脳が想像する以上、ややこしくて、永遠に分からないものなのだ、と彼は思った。」「三二五頁」

これはなにも新しいテーマではない。トリスタンも日本に着いたばかりの青二才だけに、日本文化等に対するコメントは怪しげで、その洞察力も不確かで頼りない。でも当たっている面もあるし、常に読者の好奇心をそそるような面白みは十二分ある。私自身、日本に来てまだ十八カ月ということもあって、主人公に非常に共鳴し、考えさせられた点も沢山ある。異文化のなかで、痛ましくつらい、それでいてたまらなく滑稽な体験をしたことのある人間なら誰でも、この小説の良さが分かるはずだ。一言でいうなら、それは著者持ち前の鋭く、皮肉なウィットによるものだと思う。

R. Hoeborn

(女子大学文学部専任講師)

J. W. Carpenter

(女子大学文学部助教授) 訳



晃洋書房
3,800円

マーシャル研究 西岡幹雄 著 (大学経済学部教授)

アルフレッド・マーシャル(一八四二—一九二四)は、ヴィクトリア時代のイギリスで生涯を過ごし、現代経済学の基礎を築いた人物として、あまりにも有名であるが、日本においてマーシャルについての本格的な研究書は、これまであまり見あたらなかった。そういう意味で、本書は大きな意義を持っている。

本書は、第I部「マーシャルの思想遍歴」、第II部「企業と産業の経済学としてのマーシャル経済学」、そして第III部「スミス、ウオーカー、そして日本のエコノミストたち」の三部から構成されている。本書の魅力は何よりも、マーシャル経済学について、理論的な研究だけにどま

らず、それを生み出した時代背景や、思想的な背景にまで、体系的に取り組んでいる点であろう。特に第I部においては、マーシャルの生涯について、ロナルド・コースの定説をくつがえす議論が展開されている。また、マーシャルの経済思想の形成過程に影響を与えた心理学の役割についての考察も興味深い。いずれについても、英国各地に保存されているマーシャルの貴重な資料を綿密に考証することによって、説得力のある議論が展開されているのである。また終章では、近代日本の経済学とマーシャルとの関係が論じられ、日本の経済学をとりまく歴史的な状況が明らかにされている。本書の読者は、近代経済学の思想的な側面にふれることによって、経済学がいかに多くの可能性に満ちた学問分野であるかを実感することができよう。

御崎加代子 (滋賀大学経済学部助教授)



Oxford UP

WORK AND PAY IN THE UNITED STATES AND JAPAN

中田喜文 (天文学部教授) ほか著

本書は日米両国の雇用制度を両国の自動車、家電、通信企業の事例調査とマクロ経済環境の両面から明らかにする。

このような比較研究は、ややもすると事実の並列的な配置になりがちであるが、この作品は次の二点でこの困難を克服している。第一はタイプ論的接近であり、第二は経済理論と事実とのギャップをできるだけ説得的に説明しようという接近法である。

第一の点について。日本の雇用制度は長期雇用、従業員の積極的な業務改善努力、長期の訓

練で特徴付けられ、この三要素が統合したシステムであるとして、これをSETシステムと呼ぶ。他方伝統的な米国の雇用制度は、厳格な職務区分、対立的労使関係、僅少な訓練で特徴付けられるJAMシステムと呼ぶ。それぞれの合理性と欠陥が指摘されるが、日本のシステムをより優れたものとして記述している。

第二の点について。何故、JAMにおいて雇用保障が「さほり」につながるのか、経済成長が所得分配の平等化と何故両立しているのか等の問いがミクロ、マクロのデータの有機的な配列に寄与している。

織り込まれている企業レベルの事実が類書のそれより遙かに手堅いことは間違いなく、アメリカの労働研究としても是非読まれるべき好著である。

石田光男 (大学文学部教授)



森山書店
3,500円

日独比較企業論への道

前川恭一著 (元大学商学部教授)

本書は、経営学・企業論の分野で実に幅広い研究実績を重ねられ大きな足跡を残された故前川恭一先生の御生前の最後の作品である。

このなかで、先生は経営学のフロンティアである国際比較経営論の領域において、ご自身が開拓された日独比較企業研究を国際会議での報告論文も交えて集大成されるとともに、私どもが進むべき今後の方向も提案されている。五編十八章からなる本書において、日独両国企業における具体的な事実の詳細な分析を通して、先生が開拓された道は、先ず日独比較資本主義論を通して比較企業分析を行い、両国の共通性と相違性を解明

し、次に企業特性の日本の特質とドイツの特質について、その形成と発展の諸要因を歴史的に鳥瞰し、最後に両国の企業経営性を見られる新しい諸特徴の問題性を比較分析を通して捉え直して理論化を図るというものである。このアプローチの適用事例は、シュトゥットガルトで開催された国際会議における先生の報告に示されている。これを「主要論点」に則して見ると、①企業形態の比較、②会社組織と役員構成の比較、③コンツェルン構造の比較、④労組と労働条件の比較、⑤中小企業と下請関係の比較、⑥政府の産業政策の比較、⑦社会的諸制度の比較などの研究項目に具体化され集約されている(本書、二四六頁以下)。先生が渾身の力で遺された道は、国際比較経営論の研究分野における旅人たちが踏み固める公道として永遠に生き続けるであろう。

仲田正機 (立命館大学教授)



見洋書房
5,700円

近世商家の経営理念・制度・雇用

安岡重明著（大学商学部教授）

事実をただ蒐集するだけでは、雑然とした遺物の集積に終る。社会をなして生を営む人間の行動の軌跡は、無数の一見さながらもつれた糸屑の山と言つてよい。誰しもわかつて居そうで、そうではない。歴史と言えば人間が対象だから、これ程簡単な学問はなく、当事者だから一番よく理解できるのだと迄、思い込むのが常である。だが、ここに陥し穴がある。事實は無数であるだけに、明確な問題意識の下に、合理的な論理に従つた処理が、歴史学の基本となる。著者安岡氏は、学者人生の出発点となった「賃労働者形成期の経済と社会」（宮本又次編）近

畿農村の秩序と変貌」以来、非領国概念の提唱で以て、今日まで、徳川期の政治・経済体制理解に大きな影響を及ぼすに至つた『日本封建経済政策史論』、財閥研究を教条主義的マルクス主義史観の呪縛から解放して、日本経営史研究の金字塔となった『財閥形成史の研究』のいずれにおいても、明確な問題意識のもと、泰西の学者の論理に身を委ねることはない。人間社会の一類型としての日本社会という認識を根底に据えて、共通の比較基準を自律的に模索しつつ、比較経営史を試みている。本書の第三章三井の経営理念、第五章三井の雇用理念から、それを良く学ぶことができる。約三十年間の長きにわたつて、積み重ねられて来た研究成果の体系的集積である。風にそよぐ蘆の如き問題意識とは無縁の、貴重な成果である。

藤田貞一郎（大学商学部教授）



ナカニシヤ出版
3,500円

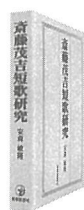
近代日本政治思想史

西田 毅編著（大学法学部教授）、
沖田行司（大学文学部教授）ほか著

投票率は上がつても政治的無関心が拡がる現実に対して、政治理論の分野では、政治の復興が語られている。この分裂に架橋するかのように、本書が刊行された。幕末の独立の危機から明治末年の「激動の半世紀」に、政治指導者や知識人が、思想的な課題にいかに関与したかについて、六人の専門家が、個性的な見解を展開している。それはおのずとして、幕末の開明的儒教、明治初年の啓蒙知識人による文明の主張、自由民権、天皇制国家の確立と国粹主義の変質、社会主義の展開という明治思想史の流れとその背後にある国民国家の形成をきわだたせて

いる。冒頭の沖田論文は、朱子学の伝統のなかで生まれた横井小楠と佐久間象山が経世学と海防学という異なった窓口を通して西洋の文明の中に日本に通じる普遍性を発見し、意図せざる結果として、儒教の解体・西洋思想の受容を行ったことを、説得的に論証している。編者でもある西田論文では、過渡期としての明治二十年代、天皇制国家の成立後に健全なナショナリズムが、条約改正・日清戦争という時代の変遷を経験する中で、次第に対外硬や義戦論を主張し、倫理的帝国主義の一翼を担うに至ったことを、民友社・政教社など思想や立場の異なる種々の論者の様々の時点での言説を緻密に分析することで導き出した。はしがきに言うように、通史の役割と、学術的価値を持つ各々の論文は、読者に対して理解するための広い関心と深い見識を要求してやまない。

田中和男（大学法学部嘱託講師）



世界思想社
10,000円

斎藤茂吉短歌研究

安森敏隆著（女子大学文学部教授）

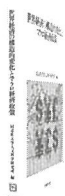
『斎藤茂吉短歌研究』を世に問うた安森敏隆同志社女子大学教授は二十年前『斎藤茂吉幻想論』を刊行し、爾来茂吉研究者の中心核として、また『創造的塚本邦雄論』など現代短歌論を展開して現代短歌の旗手、さらには朝日新聞京都短歌の撰者として現在活躍中である。

本書は既発表論文と書下論文とを短歌論・歌集論・歌人論・読者論の四編に構成している。第一編短歌論十章の諸論の論点は多様なが、各章は歌の表現や編纂の背景としての事実を究める研究者の方法と実作者としての歌に対する鋭敏な感覚とが相俟って可能となった、茂吉短歌の本質に迫る好論である。

もとより論者が重点を置くのは、第二編歌集論十章である。

各章とも歌人茂吉・作品茂吉・編纂者茂吉の三節で統一的に構成する。第一章の作品茂吉の節で、まず言語の表現機能に言霊言語など三段階を指定する。これを茂吉短歌の表現評価の基準とし、茂吉の十七歌集を九章に分けて発表順に歌集一集乃至四集を取り上げ、その短歌の質を大局的に把握するとともに編纂者茂吉の営為を具体的に論じている。歌人茂吉の編纂者としての側面の体系的な研究で、茂吉研究を大きく前進させた業績と評価されよう。

第三編歌人論は茂吉の与謝野晶子・明星観、森鷗外観を、第四編読者論は茂吉短歌の読み方や享受史を論じたものである。本書は茂吉に関心を持つ人にとって刺激的であるのみならず、一般の読者にも茂吉に親しみを感じさせる契機となる著作といえる。寺川眞知夫（女子大学文学部教授）



嵯峨野書院
2,850円

世界経済の構造的変化とマクロ経済政策

同志社大学人文科学研究所編
藤原秀夫・山根 学・

太田進一（以上大学商学部教授）

植田宏文（天学商学部助教授）

林田秀樹（天学人文科学研究所専任講師）

ほか執筆

世界の政治経済システムは、冷戦終結後、堰を切ったように変貌している。その変貌のスピードは速く、かつ、広範囲にわたっている。たとえば、アジアの通貨危機、EUの通貨統一問題、地球環境問題などをみても、一国のみの問題ではなく地球規模の問題である。それは、各国の政治経済が益々相互依存の関係を深めてきたからである。と同時に新たな問題も浮上してきた。すなわち、政治経済システムが将来安定した制度改革や構

造変化へと収束していくのか。あるいは、各国のマクロ経済政策はどのように波及し、また、政策協調は果たして成功するのか、が問われている。

本書は、このような問題意識の下に人文研で進められた研究成果の一端をとりまとめたものである。いうまでもなく、現代の問題をすべて網羅することは不可能ではあるが、時宜を得た示唆の多い研究成果になっている。各章で扱われている内容は、日米不均衡問題の本質、米国の金融システム、EUの通貨統一問題、ロシア・中国経済の行方、アジアの貧困・不平等問題、中東和平の不透明性など岐にわたっている。さらに、政策協調のあり方や政治経済のグローバル化を加速させている情報通信技術の進展などにも言及されている。この部門研究は新しいテーマのもとに継続されており、さらなる研究成果が期待される。

西村 理（大学経済学部教授）

ハワイ日系社会の文化とその変容

沖田行司編著（天文学部教授、

国生・寿・金子邦秀・井上智義・

黒木保博（以上 天文学部教授）・

吉田 亮（天文学部助教授）著

ナカニシヤ出版 4、800円

本書は、人文科学研究所の共同研究「多民族社会における異文化交流と社会構造の変容に関する研究——カナダ・ハワイの場合」による、ハワイに関する成果である。副題が示すように、一九二〇年代のマウイ島に研究対象が限定された論集であり、アメリカ史やハワイ文化、あるいは多民族・異文化問題に関心のある人みんなが興味を持てるという内容ではないかもしれない（マウイ島がハワイ諸島のどの島であるかを知っている人は、そう多くないだろう）。にもかかわらず（あるいは、それ故に）、本書の学術的価値は、はかりしれない。理由はふたつある。まず、学際研究の必要性が叫

ばれて久しいが、本書ほど焦点の絞られた課題について学問分野の異なる研究者が渾身の努力を傾けた学際的共同研究を私は知らない。教育学はもとより、心理学・社会福祉学・地理学などにおいて、いずれも個別領域の業績として十分な評価を受けるに値する諸論文が、ひとつの課題に向かって隊列を組んでいる姿は圧巻である。そして、『馬哇新聞』の徹底した分析を核とする、史料にもとづいた厳密で堅実な実証的手法によって過去を再現しようとする（ミクロ・ヒストリ）は、当時を生きた日系人の息づかいをも読者に感じさせる。私も、本書のもとになった研究会に出席したことがあるが、本書執筆者たちのハワイと日系人への思い入れは、危険なまでに熱いものであった。ハワイとの関係が深い同志社が、こうした研究を世に送り出したことの意義は大きい。

山田史郎（天文学部教授）



同朋舎
2,857円

京都のキリスト教

—同志社教会の19世紀

本井康博著（天文学部嘱託講師）

新島襄はまだ在米中であつた一八六八年に、日本伝道の開始をアメリカン・ボードに進言している。それ以降、同志社教会が三十周年を迎える一九〇〇年までの三十二年間の経緯を、本書は極めて緻密に明らかにしている。同志社教会が二〇〇一年を目標に企画している百二十五年史における「十九世紀編」という位置づけも本書にはある。とまれ本書が与えてくれるものは、本学や周辺に多大な影響を与えてきた各個教会の変遷だけではない。宣教師の視点そして資料としての宣教師文書を分析するという画期的なアプローチによって、「同志社の教会」に寄せられてきた、ステーション

としての期待が詳らかにされているのである。伝道の前線基地、ステーションとして「同志社の教会」を見る時、教会史は地域史やひいては日本の近代文化史から大きく位置づけられることになることと示されている。

豊富な写真と図版、洗練された筆致で、学習だけでなくまた回顧だけでなく、新鮮な知識欲を満たしてくれる立体的な歴史書である。記述の正確さに万全を期す傍ら、多くの人々が親しめるように、そして「同志社の教会」に係わる人々が興味と誇りを感じるようにと筆者は心掛けられたという。筆者の教会というものの歩み様に対する暖かい愛情をそうした姿勢からも感じることができる。新潟県の新潟、長岡両教会の百年史を執筆されたほか、本学の人文研の共同研究を牽引してこられた筆者ならではの「いい仕事」の一冊といえよう。

吉田 亮（天文学部助教授）